

エジプト中王国時代の祭祀土器の廃棄堆積について

—アブ・シール南丘陵遺跡の例とその時間的变化—

矢澤 健

Pottery Refuse Deposits and Ritual Offerings in the Middle Kingdom:
A Case Study at Abusir South and its Diachronic Change

Ken YAZAWA

古代エジプトでは神々や王に向けて供物を捧げる祭祀が日常的に行われており、祭祀の後に供物容器を捨てた場所が葬祭殿等で発見されている。こうした祭祀址は、考古学的分析から祭祀の様相や時間的变化を推測する手掛りになると考えられる。早稲田大学が調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡では中王国時代の祭祀跡と考えられる土器の集中が発見されており、この資料を例として分析を試みた。集中範囲から4箇所の区画を資料として用い、垂直方向の土器の変化を見ていった結果、出土する土器が粗雑になり、小型化していく「簡略化」傾向を看取することができた。一方で土器の個体数は増加していることから、祭祀に必要な土器の絶対量の増加が簡略化の原因と考えられ、中王国時代第12王朝末に見られる神々に対する祭祀活動の活発化がその背景にあると推測される。

キーワード：エジプト中王国時代、祭祀土器、供物、アブ・シール南丘陵遺跡、大量生産

In Ancient Egypt, offering rituals for the Gods and Pharaohs were conducted daily, and in modern times, the cult debris of rituals were reported mostly around the mortuary temples. The debris consisted merely of piles of offering vessels, and it may possibly help to reveal aspects and chronological change of the cult. However, with only a few exceptions, current research is still inadequate to demonstrate these details.

The Waseda University mission discovered the Middle Kingdom cult debris deposit at Abusir South, which consisted of pot sherds. The aim of this article is to clarify the chronological development of the cult through pottery analysis. Four parts were selected from the debris to scrutinize the vertical variability of the pottery. Consequently, while pottery declined in quality and miniaturized gradually, the quantity of pottery increased. It is assumed that the growing need for more cult pottery forced the disqualification and miniaturization of offering vessels. The catalyst behind these changes, was an intensification of the cult for the gods, that was purported to begin at the end of the 12th dynasty.

Key-words: Middle Kingdom Egypt, Abusir South, cult pottery, offering, mass production

はじめに

古代エジプトの王を祭った葬祭殿などでは、日常的に供物を捧げる祭祀が行われており、使用された土器は祭祀の後に廃棄されたと考えられている。その結果、土器の集中として祭祀の址が考古学的に認識されるに至っている(Allen 2006: 22; Wegner 2000: 111-112)。こうした土器群は、当時の祭祀の様相や時間的变化を明らかにする上で第一級の資料になり得ると思われるが、いくつかの例外を除いて出土状況や出土品の内容の十分な記録とそれに基づいた詳細な考古学的研究が行われているとは言いがたい状況である。

早稲田大学の古代エジプト調査隊(隊長：吉村作治)が調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡では、中王国時代における祭祀活動を示す遺構が発見されている(吉村・近藤・長谷川他 2003: 17-18)。葬祭殿と同様、大量の土器群が密集して出土しており、土器の出土位置情報や垂直方向の分布状況の記録を行っている。これまでの研究の結果、器形の組成が同時代の葬祭殿で発見されている祭祀土器の廃棄堆積と極めてよく似ていることが指摘されている。付近からは、中王国時代の土器とともに木製の女性像、ライオン女神の塑像などが納められた岩窟遺構が発見されており、土器群は岩窟遺構で行われた祭祀活動に関係している

と考えられている (Kawai et al. in press; 矢澤 2007: 50-51)。本稿では、これらの土器群を用いて、特にその時間的変化に着目して分析を行い、アブ・シール南丘陵遺跡における祭祀活動の変化や傾向を考察し、考古学から見た中王国時代の祭祀の様相について一例を提示したい。

祭祀土器の廃棄堆積に関する研究史

古王国時代、中王国時代のピラミッドに付属する葬祭殿においては、ミニチュア土器¹⁾が大量に密集して出土する場所がいくつか報告されている。古王国時代の例では、メイドゥーム (Meidum) (Milward-Jones 1991)、ダハシュール (Dahshur) (Faltings 1989)、アブ・ラワシュ (Abu Roash) (Marchand and Baud 1996)、アブ・グラーブ (Abu Ghurob) (Kaiser 1969: 56-75)、アブ・シール (Abusir) (Barta 1995)、サッカラ (Saqqara) (Mathieu 2002: 527)、ギザ (Giza) (Reisner 1931: 13-14, 228) などの葬祭殿で確認されている²⁾。中王国時代では、リシェト (Lisht) のセンウセト 1 世葬祭殿 (Arnold 1989: 116-117, table 2) やラフーン (Lahun) のセンウセト 2 世のピラミッド付近 (Petrie et al. 1923: 11)³⁾、アビドス (Abydos) のセンウセト 3 世葬祭殿の正面入り口付近の

堆積 (Wegner 2000: 111-112)、ダハシュールのアメンエムハト 3 世葬祭殿の Keramikkomplex 6 (Arnold 1982)、ハワラ (Hawara) のアメンエムハト 3 世葬祭殿 (Petrie et al. 1912: 33)⁴⁾ などがある (各遺跡の位置については図 1 を参照)。これらの遺跡にある土器集中に共通する特徴として、まずミニチュア土器が大半を占めるということ、土器が密集して出土すること、葬祭殿付近 (主に参道の傍) で出土することなどが挙げられる。このような特徴を示す土器群は、定期的に、もしくは日常的に、葬祭殿内で行われていた儀式で使用され、その後廃棄されたものと考えられている (Wegner 2000: 112; Allen 2006: 22)。

葬祭殿の多くは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて発掘が行われており、報告書の中でミニチュア土器が大量に密集して出土したことが記述されるのみであり、器形の詳細や、器形ごとの出現頻度などが報告されていることは稀である。こうした中で、中王国時代では、D. アーノルド (Arnold) によって報告されているダハシュールのアメンエムハト 3 世葬祭殿で発見されている Keramikkomplex 6、J. ウェグナー (Wegner) によって報告されているアビドスのセンウセト 3 世葬祭殿の儀式で使用された土器の廃棄デポジット (Cult Building Refuse Deposit) が詳細な



図 1 エジプト全図

報告と分析が行われた例として特筆されるべきである。これらの報告では、まず出土する器形の組成を明らかにし、各器形の個体数をカウントしている。そして各器形の割合を示すことで、遺構の特徴を具体的な数値によって明示している。しかしながら、これらの報告でも分析に際し土器群を一括して取り扱っており、土器群の時間的な変化までは述べられていない。

アブ・シール南丘陵遺跡、石積み遺構南側堆積から出土した土器集中

早稲田大学古代エジプト調査隊が発掘を行っているアブ・シール南丘陵遺跡では、丘陵の南東斜面より古王国時代に年代付けられる石積み遺構が出土しており、その背後（北側）の斜面からは2つの岩窟遺構（AKT01、AKT02）が発見されている（図2）。岩窟遺構の内部からは中王国時代の土器とともに陶製・土製のライオン女神の像やいくつかの女性像などが出土している（吉村・近藤・長谷川他 2003: 35-41; 吉村・近藤・菊地他 2003: 16-26; Yoshimura et al. 2005: 365-397）。また石積み遺構の南側の堆積からは中王国時代の土器が密集して大量に出土している（吉村・近藤・菊地他 2003: 17-19, Pl.3-5; 吉村・近藤・河合他 2004: 30-35, Figs.13 ~ 15, Pl.4-3, 4; 吉村・近藤・河合他 2005: 21-

25, 29-30, Fig.15-1 ~ 5; 吉村・近藤・河合他 2006: 23-29; 吉村・近藤・河合他 2007: 33-35）。

土器群は石積み遺構の南東に位置し、出土範囲は東西約30m、南北約10mの楕円形状となっている。土器が集中する層は表層の下にあり、他の層と識別できるが、集中層そのものを分層することは難しい。しかしながら、土器群は均一に堆積しているわけではなく、区画によって密集の度合いにも差が見られる。また、一部ではピット内に廃棄されている例も見受けられる。出土状況の観察から、約50cm四方に土器が集中する小さな「塊」が多数確認されており、土器の集中はこのような「塊」が集積して形成されたものと考えられる。

土器そのものの特徴として、全体的に小型の器形が多いことや、焼成が良好でないものが多い。またこれまでに報告されている器形は34種類あり（図3）、類例から、少なくとも中王国時代第12王朝中期から第13王朝初期にかけての活動に由来すると考えられている（Yoshimura et al. 2005: 396）。分類の方法については、アーノルドの方法（Arnold 1988: 135-136）にほぼ準拠しており、一部改変を加えている（矢澤 2007: 44）。2001年度および2002年度調査で出土した土器群の器形組成や各器形が全体に占める割合を分析したところ、90%以上がミニチュアの皿形土

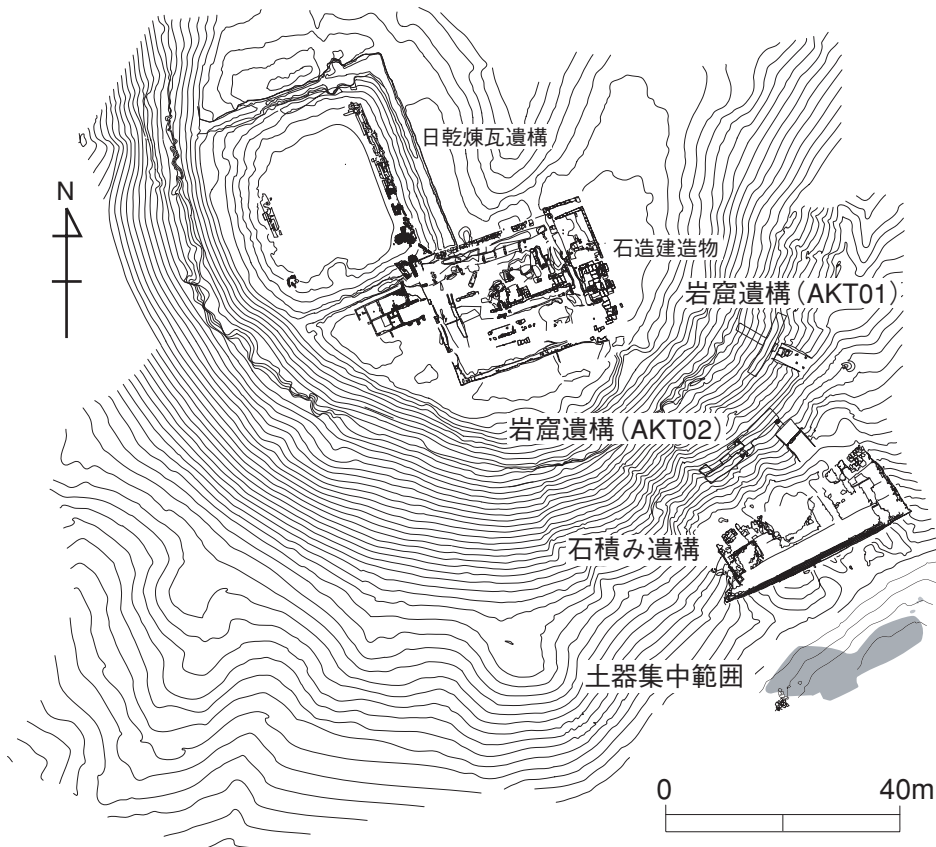


図2 アブ・シール南丘陵遺跡

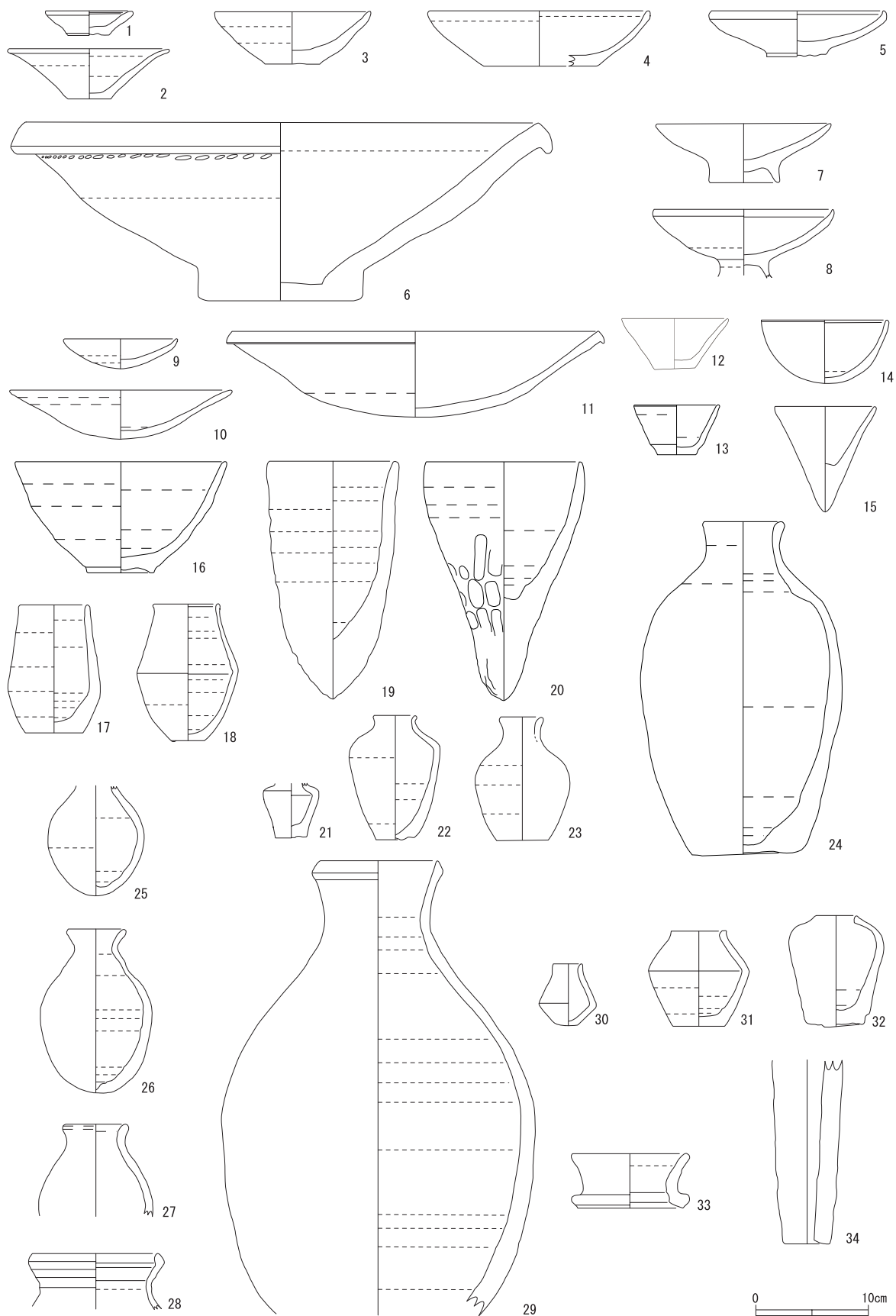


図3 これまでに報告されている器形

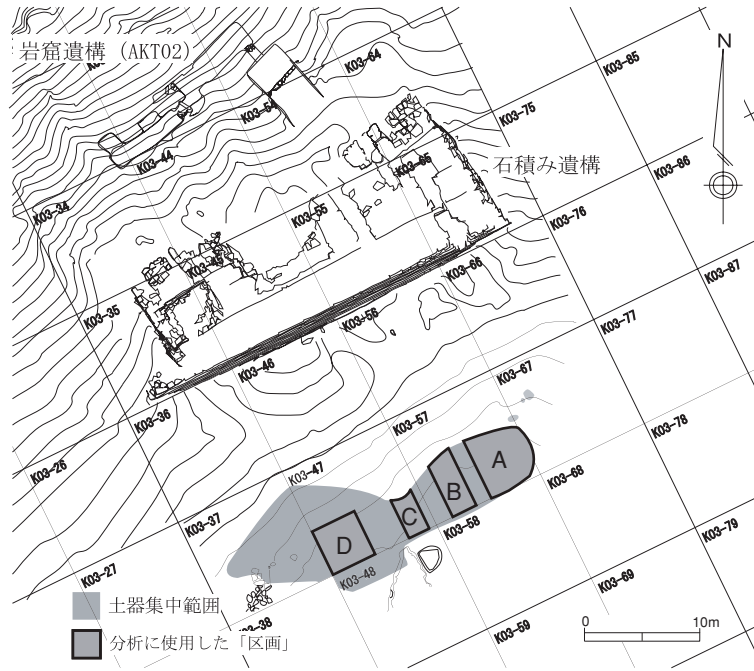


図4 土器の出土範囲と分析に使用した「区画」

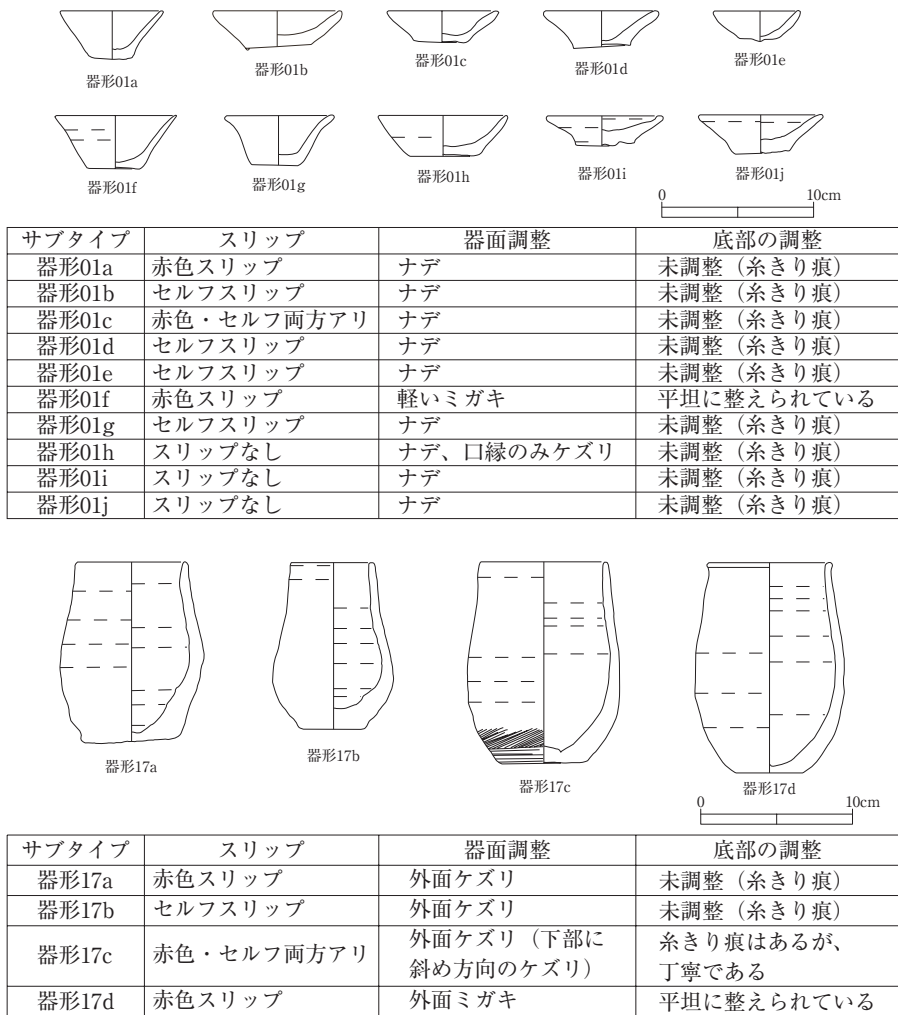


図5 器形01、器形17のサブタイプとその分類基準

器とビーカー形の土器で占められており、同時代のアビドスのセンウセルト3世葬祭殿における正面入り口外の堆積から大量に出土した土器群と極めてよく似た組成を示している。センウセルト3世葬祭殿の例は、葬祭殿で日常的に行われていた儀式で使用されたものと考えられており、アブ・シール南丘陵遺跡でも同種の儀式が行われていたと推測されている (Kawai et al. in press; 矢澤 2007: 50-51)。

資料と考察の方法

アブ・シール南丘陵遺跡で石積み遺構の南側から出土した堆積は、2002年度から2006年度にかけて調査が行われており、年度をまたいだ発掘調査の進行上、いくつかの「区画」に分けて発掘が行われている。さらに、土器の集中区画は分層することが困難であることから、各区画で10cmごとに分けて取り上げ、10cm掘り下げるたびに出土範囲と高さを記録している。この中からA～Dの4つの「区画」を選び出し (図4)、各「区画」のレベルによる土器の差異について分析を行い、土器集中の時間的変化や傾向について考察することが本稿の目的である。

これまでの報告で土器は34種類の器形に分類されているが (矢澤 2007: 図3～5)、全体の約90%はミニチュア

皿形土器 (器形01) と小型のビーカー形土器 (器形17) で占められていることが判明している (Kawai et al. in press; 矢澤 2007: 50-51)。そこで大多数を占める器形01 (ミニチュア皿形) と器形17 (小型ビーカー形) をさらに細分化することによって、より詳細な時間的変化や傾向が明らかにできると期待されたため、これらの形状、器面調整、底部の調整の有無、スリップなどから分類を行い、前者は10のサブタイプ (器形01a～器形01j)、後者は4つのサブタイプ (器形17a～器形17d) に細分した (分類の詳細については図5を参照)。この分類をもとに、各区画の各レベル (約10cm毎) で出土している器形の構成 (サブタイプごとの出土個体数) を検証した。4つの区画で出土した器形01の最小個体数は892、器形17の最小個体数は1104、全部で1996個体である。区画ごと、レベルごとに見られる差異から、廃棄堆積の時間的変化やその傾向について分析を試みる。

サブタイプの変遷と時期区分

前記の分類を基に分析を行った結果、各区画の各レベルで出土しているサブタイプの個体数を記載したものが表1である。そして器形01、器形17それぞれの割合を図化し

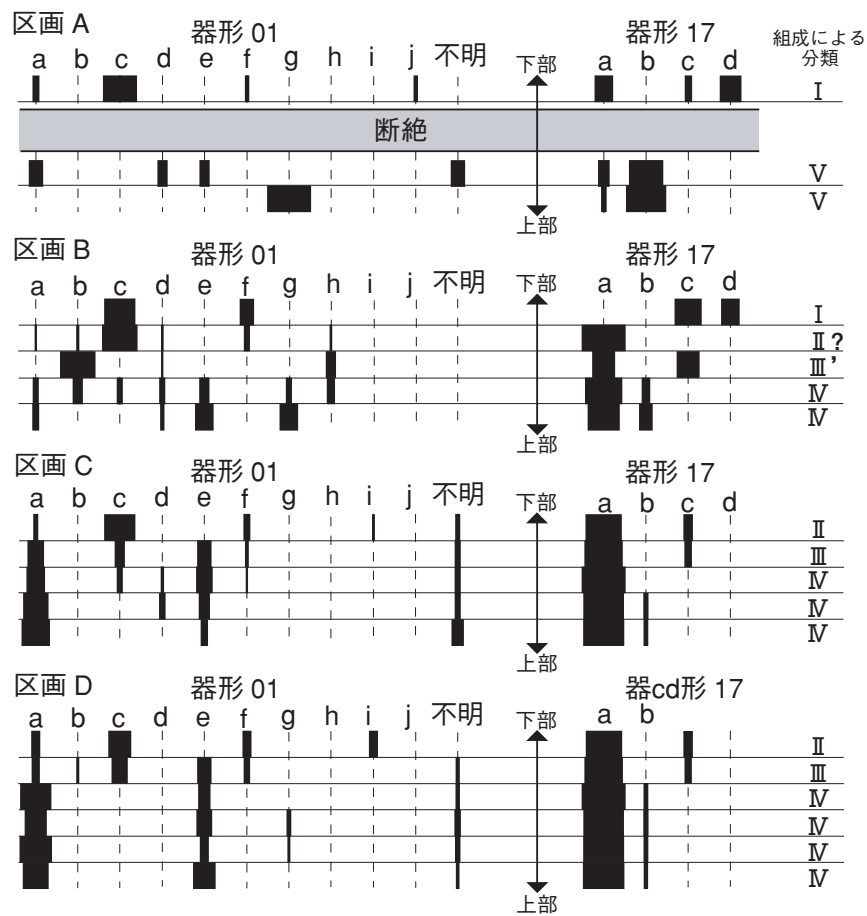


図6 各区画、レベルにおける器形01、器形17のサブタイプの割合

表1 各時期、レベルのサブタイプ別固体数と割合

個体数

区画	レベル(m)	器形01												器形17					器形 01+17
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	不明	計	a	b	c	d	計	
A	0.3	4	0	25	0	0	2	0	0	0	2	0	33	6	0	2	7	15	48
	0.8	3	0	0	2	2	0	0	0	0	0	3	10	4	13	0	0	17	27
	0.9	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4	2	19	0	0	21	25
B	0.2	0	0	9	0	0	4	0	0	0	0	0	13	0	0	6	4	10	23
	0.4	1	4	88	2	0	9	0	2	0	0	0	106	2	0	0	0	2	108
	0.5	0	90	0	1	0	0	0	23	0	0	0	114	1	0	1	0	2	116
	0.6	3	9	3	4	8	1	5	6	0	0	0	39	21	4	0	0	25	64
	0.8	2	0	0	1	7	0	7	0	0	0	0	17	42	16	0	0	58	75
C	0.2	3	0	28	0	1	5	0	0	0	0	3	40	8	1	2	0	11	51
	0.4	32	0	18	0	28	4	0	0	0	0	9	91	51	1	8	0	60	151
	0.5	35	0	9	3	30	1	0	0	0	0	11	89	85	0	0	0	85	174
	0.6	5	0	0	1	2	0	0	0	0	0	1	9	46	4	0	0	50	59
	0.7	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	8	27	2	0	0	29	37
D	0.4	1	0	3	0	0	1	0	0	1	0	0	6	16	0	12	0	28	34
	0.6	16	3	36	0	31	12	0	1	0	0	6	105	78	16	7	0	101	206
	0.7	11	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	16	59	5	0	0	64	80
	0.9	42	0	0	0	29	0	6	0	0	0	10	87	71	13	0	0	84	171
	1.0	59	0	0	0	14	0	2	0	0	0	7	82	282	74	0	0	356	438
	1.2	13	0	0	0	9	0	0	0	0	0	1	23	81	5	0	0	86	109
総計																	1996		

割合

区画	レベル(m)	器形01(%)											器形17 (%)			
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	不明	a	b	c	d
A	0.3	12	0	76	0	0	6	0	0	0	6	0	40	0	13	47
	0.8	30	0	0	20	20	0	0	0	0	0	30	24	76	0	0
	0.9	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	10	90	0	0
B	0.2	0	0	69	0	0	31	0	0	0	0	0	0	0	60	40
	0.4	1	4	83	2	0	8	0	2	0	0	0	100	0	0	0
	0.5	0	79	0	1	0	0	0	20	0	0	0	50	0	50	0
	0.6	8	23	8	10	21	3	13	15	0	0	0	84	16	0	0
	0.8	12	0	0	6	41	0	41	0	0	0	0	72	28	0	0
C	0.2	8	0	70	0	3	13	0	0	0	0	7.5	73	9	18	0
	0.4	35	0	20	0	31	4	0	0	0	0	9.9	85	2	13	0
	0.5	39	0	10	3	34	1	0	0	0	0	12	100	0	0	0
	0.6	56	0	0	11	22	0	0	0	0	0	11	92	8	0	0
	0.7	63	0	0	0	13	0	0	0	0	0	25	93	7	0	0
D	0.4	17	0	50	0	0	17	0	0	17	0	0	57	0	43	0
	0.6	15	3	34	0	30	11	0	1	0	0	5.7	77	16	7	0
	0.7	69	0	0	0	25	0	0	0	0	0	6.3	92	8	0	0
	0.9	48	0	0	0	33	0	7	0	0	0	11	85	15	0	0
	1.0	72	0	0	0	17	0	2	0	0	0	8.5	79	21	0	0
	1.2	57	0	0	0	39	0	0	0	0	0	4.3	94	6	0	0

※レベルは一番深い区画Bの地山レベルの平均値を0とする

たものが図6である。図6では、幅の太さが割合の高さを示している。区画Aの最下部から出土した土器の組成が、図6の区画Aの一番上にある器形01と器形17に対応する。図6によって、堆積のレベルごとにサブタイプの割合がどう変遷していくのかを区画ごとに観察してみたい。

まず図6の器形01に着目してみると、どの区画でも堆積の下部ではcが圧倒的に多くfが付随するという特徴がある。堆積の上部ではaとeが多く、上部と下部の間はc、fとa、eが混在する様子が見受けられる。区画Aには、途中土器が含まれない砂層が含まれている。さらに、他の区画では上部はaとeが多いが、区画A最上部はgが突出しており、そもそも個体数が極めて少ない(4個体)という特徴がある。また、区画Bでは中間にbとhが多く含まれており、やや様相が異なる。

次に器形17に着目すると、区画Aと区画Bの最下部では、dが含まれているといった共通性があり、他の区画・レベルでdは出土しない。区画B、区画C、区画Dでは下部にaとcの組み合わせが多く、上部にaとbが多い傾向がある。区画Aの上部ではaとbで占められる点はこの区画と同じだが、aよりもbが圧倒的に多いという特徴がある。全体的に見て、いくつかの特異な区画はあるものの、傾向として器形01は下部でc、fが多く、上部にa、eが多い傾向があり、その間は中間的な様相を示している。器形17も下部ではaとcが多く、上部はaとbで占められるという傾向がある。これらのことから、少なくとも区画B、C、Dではそれぞれに大きな差は見受けられず、似通ったサブタイプの変遷が見られる。上下関係による差異であることから、これらは廃棄が行われた時期の差であることが推測される。

各区画では細かな差異はあるものの、多くの共通点があることが看取された。ここで、各区画、各レベルの時間的前後関係を把握するために、各区画の各レベルを単位として、特徴的なサブタイプの組み合わせから各レベルの分類を行った。分類の基準は表2に記載しておりI~VとⅢ'による6つのグループがある。区画Bにある器形01b、hを特徴的に含む堆積は、器形17のa、cと共伴しており、

表2 各レベルのサブタイプの組成による分類の基準

	サブタイプの組成	
	器形01	器形17
I	c, f 主体	dを含む
II	c, f 主体	a, c
III	c, f 主体だが、a, e が混じる	a, c
III'	b, h 主体	a, c
IV	a, e 主体	a, b (a>bまたはaのみ)
V	個体数自体が少なく、特定のサブタイプはない	a, b (a<b)

IIとIVの堆積に含まれていることなどⅢと似通った特徴があることから、Ⅲ'とした。

この分類の結果は、図6の右側に記載した。区画Bは下部から順にI、II、Ⅲ'、IVと順に並んでおり、区画C、Dも下部からII、III、IVの順で並び、IVの堆積が厚いことが見受けられる。これらのことから、廃棄される土器の組成がI→II→III→IVの順で変化していったと推測される。Vについては、IVの段階で出現する器形17bが、IV以前から出土していた器形17aより多くを占めるようになっていくことから、IVの後に位置づけられる。結果としてI→II→III(Ⅲ')→IV→Vの順で堆積が形成されていったと推測される。組成による堆積の時期区分として見なすことができるので、それぞれのグループを以下ではI~V期と呼称する。

ここで、I~Vの各グループに含まれる器形01、器形17以外の器形の類例から、I~Vのおおよその年代を推定し、順序関係を検証してみたい。

I~Vの堆積に含まれる年代の基準となる器形について、以下に列挙する。括弧内は類例のある年代である。

I期

器形16 (第12王朝中期)⁵⁾

II期

器形14 (第12王朝中期)⁶⁾

器形29 (センウセレット3世治世~アメンエムハト3世治世前半)⁷⁾

III期

器形14 (第12王朝初期?)⁸⁾

器形28 (アメンエムハト3世の治世~第2中間期)⁹⁾

IV期

器形14 (アメンエムハト3世の治世~第13王朝初期)¹⁰⁾

V期

器形28 (アメンエムハト3世の治世~第2中間期)¹¹⁾

上記の器形には、I期、II期は第12王朝中期~センウセレット3世の治世までの類例が多く、III期~V期はアメンエムハト3世の治世~第13王朝初期の類例がみられる。類例による年代からも、I~Vは時代的な順序関係であることが裏付けられる。

サブタイプの時期的変遷に見られる傾向とその背景

I~V期にかけて、使用される土器がわずかではあるが

変化していく様子が、サブタイプによる組成の変遷から見受けられた。このような時期的変化に見られる傾向について考えてみたい。

まず、器形 17 の変遷に着目してみると、古いほうからサブタイプの d、c、a、b の順で出現している。これらのサブタイプに見られる特徴として、まず器形 17d は口縁部に縁取りが見られ、器壁は薄く外面はスリップ塗布後にミガキが施されており、底面も平坦に整えられていて糸切りの痕が完全に消されている。器形 17c は口縁部に縁取りはなく、器壁は 17d と同様に薄手だがミガキは施されていない。胴部下部には斜め方向のケズリが見られ、ロクロから切り離した後も調整を加えている。底面は糸切り痕が消えるほどの調整は加えられていないが、丁寧にロクロから切り離されているようであり、切り離された時にしばしば残る底面の凹凸はほとんど見られない。器形 17a は器壁が厚手であり、ロクロから切り離した後に特に外面を調整した痕跡は見られない。糸切りはしばしば粗雑であり、底面は平坦でないことが多い。器形 17b は a と同様だが、胴部径に対して底部が細く、より小型である。全体的に見ても、器形 17d から器形 17b に向かうにつれ、徐々に器形が小型化していることが見受けられる。

器形 01 については、サブタイプの数が多いためやや複雑であるが、共通する特徴を有するものが I 期から V 期を通じて出土している。それは器形 01a と f であり、両者とも断面が台形状で、外面に赤色スリップが塗布されている。また同様の特徴を有するが、やや大型のためミニチュア土器に含めなかったものとして「器形 12」があり、I 期のみ共伴している (図 3)。それぞれの細部の特徴を見ると、まず I 期の器形 12 は外面にミガキが施されており、底面は平坦に整えられ糸切り痕が見られない。次に I 期か

ら III 期に見られる器形 01f はより小型で、表面に軽いミガキが施され、薄手で底部の糸切りが比較的丁寧に行われている。III 期以降出現する器形 01a はさらに小型であり、赤色スリップは塗られているが特にミガキを受けている様子はなく、底部は糸切り痕が残っている。特徴や堆積の関係から見て、器形 12 → 器形 01f → 器 01a の順で中心的に製作されていたタイプが変遷していったと推測される

以上のことから、器形 17 と器形 01 (器形 12) に共通する傾向として、古いものから新しいものになるにつれ小型化し、整形にかかる手間が省かれている。こうした土器製作における小型化・簡略化には、どのような背景があるのだろうか。1 つの仮説として、この遺跡における祭祀活動が徐々に衰退していった可能性も否定できない。しかしながら、祭祀が衰退する場合、供物として 1 回に使用する土器の個体数を減らす、もしくは祭祀を行う頻度が少なくなる可能性は十分考えられるが、器形 17 や特に器形 01 のような、極めて小型の土器の製作に直接影響が現れるとは考えにくい。

また、各時期の土器の個体数について見てみると、1996 個体中 I 期は 75、II 期は 193 個体、III 期は 473 個体、IV 期は 1207 個体、V 期は 52 個体となっている (図 7)。各期の期間については、III 期から IV 期の堆積に出土している土器はアメンエムハト 3 世の治世中頃から第 13 王朝初期に年代付けられており、D. アーノルドの研究によると約 80 年間と考えられている (Arnold 1982: 39)。したがって、III 期～IV 期は長く見積もって約 80 年と考えられる。I 期、II 期の期間についても正確に特定するのが難しいが、I 期の開始 (第 12 王朝中期) をアメンエムハト 2 世からと考えると、アメンエムハト 3 世の治世前半までは D. フランケ (Franke) の編年に従えば約 80 年であり (Franke

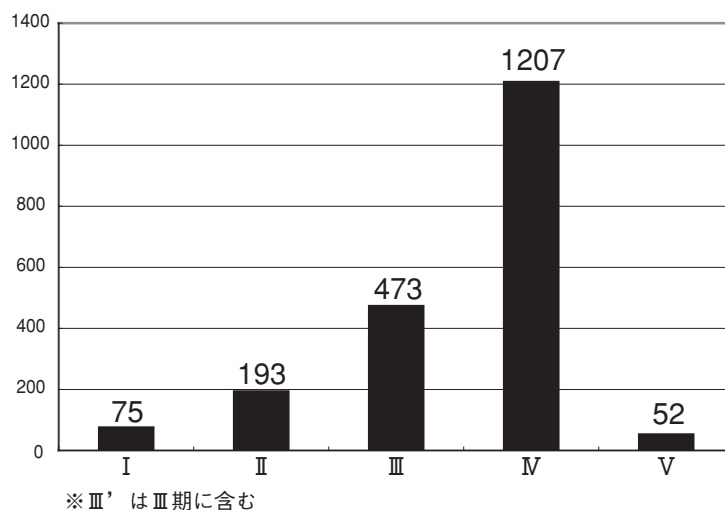


図 7 各時期に出土している個体数

1988: 136-137)、I、II期はIII、IV期とほぼ同じ長さと考えられることができる¹²⁾。I、II期の総個体数は268であり、III、IV期が1780であることを考えると、廃棄された土器の個体数は大幅に増えていると推測される。

このことから、土器製作における簡略化を生み出した背景として、必要とされた土器の絶対量の増加が考えられる。1回の祭祀において使用される土器の量が増えたか、もしくは祭祀が行われる頻度が増加したことによって、土器の需要が増大しより多くの土器を製作する必要性に迫られたため、1つの土器に対する製作時間を短縮せざるをえない状況となったのではないだろうか。

大量生産による土器製作の簡略化という状況は、古代エジプトに限らず多くの場合土器製作の専門化に伴っているように見受けられる。土器製作の専門化が進んだ場合、土器そのものに見られる特徴として、土器の胎土、大きさ、色、器形などの規格化、大量生産化に伴う製作方法の規格化・簡略化などが挙げられている(Rice 1981: 220)。エジプトでは先王朝時代のナカダII期にはすでに土器製作の専門化が進んでいたと考えられており(Mond and Myers 1937: 50; Bourriau 1981: 44)、本稿で取り扱っている中王国時代の資料に見られる製作量の増加は、古代エジプト全体の土器製作技術の発展過程とは合致しないことは確かである。しかしながら、土器の大量生産化に伴って土器製作方法が簡略化するという現象は、本稿の資料に見られる状況と類似しており、注目に値する。

古代エジプトにおける土器工房そのものに関する資料は極めて乏しく、本稿で扱っている祭祀土器を供給していた土器工房について、明確にわかる資料は今のところ皆無である。したがって土器製作の現場から見た検証は難しいが、祭祀に使用した土器を供給していた工房の事例は少ないながらも報告されている。アブ・シールのケントカウエスの葬祭殿では、葬祭殿内部に土器工房が存在することが明らかになっており、出土している土器から葬祭殿で行われた祭祀に使用する供物容器を供給するための工房であったことが推測されている。その他、王の葬祭殿付近で発見された土器工房と推測されている例としては、ダハシュールのスネフェル王の赤ピラミッド(Stadelmann 1983: 228-230)とギザのメンカウラー王のピラミッド葬祭殿のもの(Saleh 1974, 1996)などが挙げられる。これらの例は古王国時代のものであり、葬祭殿で行われた祭祀で使用する土器を供給するために営まれた土器工房が古王国時代から存在していた可能性がある。

こうしたことから、アブ・シール南丘陵遺跡で行われていた祭祀活動の背後には、祭祀で使用する土器を供給していた特殊な土器製作工房が存在していた可能性も否めない。もちろん、周辺地域で流通していた実用の土器を供給

していた工房が、祭祀に使用していた土器も製作していた可能性も考えられる。いずれにせよ、必要とする土器の絶対量が大幅に増加した場合、土器製作工房の規模を容易に拡張することができなければ、製作工房に対する負荷は当然大きくなると考えられる。その結果として、土器1個あたりの製作時間の短縮化が必要となり、土器製作における簡略化につながったのではないだろうか。

結論と今後の展望

中王国時代は、特にセンウセレト3世、アメンエムハト3世の治世頃から、王の葬祭殿において‘mansions of millions of years’と呼ばれる神々の礼拝施設を集めた神殿が建設され、神々への祭祀に重点が置かれるようになる(Wegner 2001: 333-334)。王自身が神々の祭祀を直接行うという枠組みを強化するものであり、後の新王国時代に受け継がれていく形式である。土器の集中の背後にある岩窟遺構からは、陶製・土製のライオン女神像や木製の女神像などが中王国時代の土器と共に発見されており、土器の集中はこれらを対象として捧げられた供物である可能性が高い。祭祀土器が神に対するものという前提に立てば、こうした時代背景の中で神々に対する祭祀が活発化し、より頻繁にもしくはより多くの供物を捧げるように儀式が変化していった可能性がある。その結果として、供物容器である土器が大量に必要となり、土器の質の低下につながったのではないか。

器形01、器形17は土器群の大部分を占めており、これまでの分類方法では明確な土器の時間的変化を追うことができなかったが、今回の分析でサブタイプに細分化した結果、比較的明確な変遷を読み取ることができたことの意義は大きいと思われる。しかしながら、あくまで、A、B、C、Dの4つの「区画」を用いた分析であるため、土器の個体数の変遷については確定的でない面もある。また、土器が大量生産化したことは推測されたが、1回の祭祀に使用する土器が増えたのか、もしくは祭祀の頻度が増えたのかが明確でない。今後は、土器集中のその他の区画の分析を進め全体の傾向を検証していく一方で、土器の出土状況に見られる「塊」の分析を通して、1回の廃棄の「単位」や1回の祭祀に使用された土器の量・セットといった、ミクロな分析を行っていきたい。

謝辞

本稿を草するにあたって、早稲田大学吉村作治教授、近藤二郎教授には、資料使用の許可を頂きました。早稲田大学エジプト学研究所の河合望氏、柏木裕之氏、西坂朗子氏、高橋寿光氏には数々のご助言を頂きました。また、査読をしていただいた先生方からも貴重な指摘を頂きました。ここに記して感謝を申し上げます。

註

- 1) 「ミニチュア土器」とは、本来実用品として使用されていた容器を模して簡略化・小型化した土器を指す (Allen 2006: 21)。多くは極めて小型で実用性に乏しく、古代エジプトでは葬祭殿や墓などでは比較的多く出土するが、住居址などで出土することは稀である。
- 2) 古王国時代に出土するミニチュアの容器の大半は、私人墓の礼拝施設や王の葬祭殿など地上で行われた祭祀に由来するものと考えられている。供物が定期的、もしくは毎日捧げられており、大量のミニチュア容器が使用され、廃棄されたため、ピラミッド複合体の周辺に大量の容器が集積する結果となった (Allen 2006: 22)。
- 3) ラフーンの例はピラミッド東側の日乾煉瓦で造られた参道付近から出土している。ミニチュアの皿形土器や小型のピーカー形、壺形土器などが大量に出土しており、W.M.F.ピートリはこの土器群は比較的貧しい人々がここに来て供物を捧げることが許されており、こうした活動の結果集積したものと述べているが、そこに石灰岩製のランプが含まれていることを疑問視している。しかしながら、これらはアブ・シール南丘陵遺跡や同時代の祭祀跡で出土している器形と極めて似通っており、ランプについても祭祀で香を焚く際に使用したと推測できることから、おそらくはピラミッドに付随する礼拝施設で使用され、廃棄されたものと考えられる。また、セド祭殿と考えられている遺構からも大量の土器が出土しているが、参道付近のものとは違う器形で占められており、労働者が使用した土器と推測されている (Petrie et al. 1923: 20)。
- 4) いわゆる「ラピリンス」に付随する参道と考えられている区画で、参道の壁に接する形で大量のミニチュア皿形土器、大型、小型の器台、壺形土器が発見されている。特に、祭祀に使用したものであるという記述はないが、器形の組成から祭祀に使用されたものである可能性が高い。
- 5) リシートの LNP756 号墓から出土している例があり、共伴する大型の丸底壺の年代から第 12 王朝中期の埋葬とされている (Arnold 1995: 17-18, note 34)。
- 6) 器形 14 (半球形碗) については、口縁を器高で割って 100 をかけた数値 (ベッセル・インデックス) によって年代を推定する研究がアーノルドを中心に行われている。時代が新しくなるにつれ、徐々に数値が低くなる (器高の割合が口縁に比べて高くなる、つまり底が深くなる) という結果が提示されている。また、中王国時代の中期以降から口縁部に赤彩が見られるようになると指摘されている (Arnold 1988: 140-141)。Ⅱ期から出土している器形 14 はベッセル・インデックスが 182 (口縁部赤彩なし) と 189 (口縁部赤彩なし) の 2 個体であり、同様の数値を示す例はセンウセレット 1 世葬祭殿でアメンエムハト 2 世～センウセレット 2 世 (第 12 王朝中期) に年代付けられている堆積に見られる (Arnold 1988: Fig.75, 143)。しかしながら、2 点のみであり、第 12 王朝後期であっても 200 に達する例外は見受けられるため、確定的ではない。
- 7) 器形 29 (大型丸底壺) も、頸部の最小径を口縁部内側の径で割ったくびれの度合いを示す数値 (アパーチャー・インデックス)、および頸部の最小径区画から口縁部までの高さによって年代を推定する研究がある (Arnold 1988: 142-143, Fig. 76)。これによるとⅡ期から出土している器形 29 は、アパーチャー・インデックスが 68.75、頸部高が 5.5cm なので、センウセレット 3 世からアメンエムハト 3 世の治世初期に年代付けられるクラスターに含まれる。
- 8) Ⅲ期から出土している器形 14 のベッセル・インデックスは 197 (口縁部赤彩なし) と 200 (口縁部赤彩なし) の 2 個体があり、センウセレット 1 世葬祭殿でセンウセレット 1 世の治世後半に年代付けられている堆積と同様の数値を示す (Arnold 1988: Fig.75, 143)。しかしながら、2 点のみであり、第 12 王朝後期であっても 200 に達する例外は見受けられるため、確定的ではない。
- 9) 器形 28 は B.バイダー (Bader) によるマール C 胎土が使用されている土器の研究でタイプ 46 に分類されており、アメンエムハト 3 世の治世から第 2 中間期にかけて類例が見られる (Bader 2001: 227)。
- 10) Ⅳ期から出土している器形 14 のベッセル・インデックスは 184 (口縁部赤彩あり)、150 (口縁部赤彩あり)、149 (口縁部赤彩あり) の 3 個体がある。ダハシュール、アメンエムハト 3 世葬祭殿の Keramikkomplex 6 はアメンエムハト 3 世の治世後半から第 13 王朝初期と考えられており、その中で最も低い数値を示すのは 150 前後であり (Arnold 1988: Fig.75)、一方で 13 王朝中期以降は 145 以上のものが見られないことから (Arnold 1988: 140)、アメンエムハト 3 世の治世から第 13 王朝初期という年代が妥当と思われる。
- 11) 註 8 と同様、アメンエムハト 3 世の治世から第 2 中間期にかけて類例が見られる (Bader 2001: 227)。
- 12) 治世年については、フランケの研究では共同統治があったものと考えている。共同統治については未だ決着を見ていないが、あったとしてもアメンエムハト 2 世とセンウセレット 2 世の共同統治は 3 年であり (Franke 1988: 117)、センウセレット 2 世とセンウセレット 3 世の共同統治を示す積極的な証拠は発見されていないため、共同統治の問題によるⅠ期からⅡ期の大幅な年代幅のズレはない。センウセレット 3 世とアメンエムハト 3 世については、センウセレット 3 世の治世 19 年以降の証拠が残っていないため、共同統治がなかった説も提示されているが (Franke 1988: 137)、近年ウエグナーによってアビドスから発見されている資料から二人の王が 20 年にもわたって共同統治していたという説 (Wegner 1995) が有力になりつつある。どちらの場合でも年代幅は同じである。

参考文献

- Allen, S. 2006 Miniature and model vessel in Ancient Egypt. In M. Bárta (ed.), *The Old Kingdom Art and Archaeology*, 19-24, Prague, Czech Institute of Egyptology.
- Arnold, Do. 1982 Keramikbearbeitung in Dahschur 1976-1981. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 38: 25-63.
- Arnold, Do. 1988 Pottery. In Di. Arnold (ed.), *The South Cemetery of Lisht I.: The Pyramid of Senwosret I*, 106-146, New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Do, F. Arnold and S. Allen 1995 Canaanite Imports at Lisht, the Middle Kingdom Capital of Egypt. *Ägypten und Levante* V: 13-32.
- Bader, B. 2001 *Tell El-Dab'a XIII. Typologie und Chronologie der Mergel C-Ton Keramik. Materialien zum Binnenhandel des Mittleren Reiches und der Zweiten Zwischenzeit*, Wien, Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Bárta, M. 1995 Pottery Inventory and the Beginning of the IVth Dynasty. *Göttinger Miszellen* 149: 15-24.
- Bourriau, J. 1981 *Umm el-Ga'ab: Pottery from the Nile Valley Before the Arab Conquest*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Faltings, D. 1989 Die Keramik aus den Grabungen an der nördlichen Pyramide des Snofru in Dahsur: Arbeitsbericht über die Kampagnen 1983-1986. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts*,

- Abteilung Kairo* 45: 133-154.
- Franke, D. 1988 Zur Chronologie des Mittleren Reiches (12.-18. Dynastie) Teil I: Die 12. Dynastie. *Orientalia* 57: 113-138.
- Kawai, N., K. Takahashi and K. Yazawa in press Middle Kingdom Pottery from the Japanese Excavations at North West Saqqara 2001-2003. In *Middle Kingdom Pottery Handbooks*.
- Kaiser, W. 1969 Tongefasse. In H. Ricke ed, *Das Sonnenheiligtum des Königs Userkaf. Band II: Die Funde, Beiträge zur Ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde Band 8*, 49-82, Wiesbaden, Franz Steiner Verlag.
- Marchand, M. and M. Baud, 1996 La céramique miniature d'Abou Rawash: Un dépôt à l'entrée des enclos orientaux. *Bulletin de l'Institut Français d'Archeologie Orientale* 96: 255-281.
- Mathieu, B. 2002 Travaux de l'Institut français d'archéologie orientale en 2001-2002. *Bulletin de l'Institut Français d'Archeologie Orientale* 102: 437-614.
- Milward-Jones, A. 1991 The Pottery. In A. el-Khouli ed, *Meidum, The Australian center for Egyptology Reports* 3: 43-45.
- Mond, R. and O. Myers 1937 *Cemeteries of Armant I*. London, Egypt Exploration Society.
- Petrie, W. M. F., G. Brunton and M. A. Murray 1923 *Lahun II*. London, School of Archaeology in Egypt.
- Petrie, W.M.F., G. A. Wainwright and E. Mackay 1912 *Labyrinth, Gerzeh and Mazghuneh*. London, School of Archaeology in Egypt.
- Reisner, G. A. 1931 *Mycerinus: The Temple of the Third Pyramid at Giza* Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.
- Rice, P. 1981 Evolution of Specialized Pottery Production: A Trial Model. *Current Anthropology* Vol.22, No.3: 219-240.
- Saleh, A. A. 1974 Excavation around the Mycerinus Pyramid Complex. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 30: 131-154.
- Saleh, A. A. 1996 Ancient Egyptian Palace at Giza and Heliopolis. In M. Bietak (ed.), *House and Palace in Ancient Egypt*, 185-194. Vienna, Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Stadelmann, R. 1983 Die Pyramiden des Snofru in Daschur. Zweiter Bericht über die Ausgrabungen and der nordlichen Steinpyramide. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 225-241.
- Wegner, J. 2000 The organization of the Temple Nfr-K3 of Senwosret III at Abydos. *Ägypten und Levante* X: 83-125.
- Yoshimura, S., Kawai, N. and H. Kashiwagi 2005 A Sacred Hillside at Northwest Saqqara: A Preliminary Report on the Excavation 2001-2003. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 61: 357-398.
- 矢澤健 2007 「アブ・シール南丘陵遺跡、石積み遺構南側堆積から出土した土器群について」『エジプト学研究』第14号 40-56頁。
- 吉村作治・近藤二郎・菊地敬夫・河合望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊第7号 11-28頁。
- 吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・河合望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊第6号 11-44頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合望・西坂朗子・中川武・柏木裕之・長谷川奏・菊地敬夫 2004 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊第8号 20-50頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤健 2005 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊第9号 13-34頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤健 2006 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊第10号 19-43頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤健 2007 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊第11号 33-58頁。

矢澤 健

サイバー大学

Ken YAZAWA

Cyber University